

塾報 しゅうめ

第36号
2015 vol.

平成27年5月10日
発行 塾長 上谷 恭範
〒111-0052
台東区柳橋1-26-3
TEL 03(3862)9218

今、英語を学ぶより、

きちんとした日本語のことは(母国語)を…。

塾長 上谷 恭範

私達は誰から言葉を教わったのでしょうか。端的に言うて母親からでしょう。生まれた瞬間から私達は、母親から「ことば」の習得が始まるのです。その言葉は日本語なのです。ことばの習得は、繰り返し繰り返し聞いていくうちに自然と覚え無意識のうちにわかるようになります。さらに日本語の中で育れた子が、大人になって長い間英語圏で生活し、英会話ができるようになって、ネイティブの英語は話せないと言われています。

外山滋比古さんは、そのことを『絶対語感』と称し、「絶対語感」は、母から学んだことばが基本となって形成されている」と述べています。だから「ことば」は、音楽における「絶対音感」に共通した絶対語感があるとも言えます。

巷間、英語で話す人を褒めそやし、また得意満面になっている人がいます。グローバル時代になったので、小さいうちから英語を学ばせると得だという母親も見受けられます。しかし母親が、わが子に、生まれた時から教えてきたことばは、母国語であり、英語のネイティブを話せるわけはありません。ですから母国語をしっかりしつけ、外山さんの言う「絶対語感」を作り上げることで、急がば回れです。



音楽とことばのワークショップ

上谷 修一郎

みなさまゴールデンウィークは如何お過ごしになりましたでしょうか。新学期を迎えてお子様も慣れない環境でいろいろと大変だったと思います。こどもの日もありましたし、家族でリフレッシュするたのめいい機会になればよかったですね。

ところで5月24日に修明学園と、クラシック音楽のアーティスト達を組織して東京下町を中心に地域と社会のために貢献することを目的とした Arts & Hearts project という音楽活動を行っているスタジオかのかの共同企画で音楽とことばについてのワークショップを行うことになりましたので、そのことについてお知らせしたいと思います。

ご存知かもしれませんが、現在修明塾のことばの学校では、パソコンの朗読音声を用いることで聴覚への刺激を通じて脳に影響を与え、読書を推進し、子供達の国語力・言語力を向上させる試みを行っております。

そこから敷衍して聴覚への刺激と言語力の向上との間に相関関係があるとするならば、聴覚への刺激はナレーションではなく音楽であっても同様、あるいはそれ以上の効果が達成できるのではないかと、つまり言語の音声のリズムと音楽のリズムの間にはある種の相関関係があると考えるべきではないだろうか？そのように私達は考えるようになりました。

実際にアメリカのノースウェスタン大学聴覚神経科学研究室のニナ・クラウス博士の研究によると、ロサンゼルス州の低収入家庭の子供達に音楽教育のプログラムを提供し、その後の彼らの進学実績を追跡調査したところ、彼らの地元の家の子供達の落第率が50%にも及ぶ中で、そのプログラムに参加した子供達の大学への進学率は93%と驚異的な数値に達したというデータがあります。

その結果としてこの音楽教育プログラム「ハーモニー・プロジェクト」からは楽器演奏を学ぶことで①言語を習得する能力、②集中して重要な話の内容を把握する能力が発達すると結論付けられることになりました。

私達はこの研究成果を踏まえて次のように考えました。日本の子供達にみなこの「ハーモニー・プロジェクト」に参加した子供達のように楽器演奏をする機会を提供できればそれが一番いい。しかしながら現在の日本の家庭環境を考えればそれはかなり難しいだろう。それは「ハーモニー・プロジェクト」の中で教育効果と最も関連する要素は何なのかを考え、そこに特化することで教育活動に取り入れていくことはできないのだろうか。

そもそも楽器演奏で求められている能力とは何だろうか。楽器演奏者は一般に演奏の前段階で①楽譜の視覚的情報を脳内で音楽イメージに変換する、②それまでに聴いた模範となる演奏の記憶を脳内イ

メージで再生するという二つの作業を行っていると言われている。その中では特に後者の②の作業が音楽と言語力・学力の相関関係を考える上では重要な意味を帯びているといえるだろう。つまり脳内で演奏のイメージを再生できるほどに、音楽を能動的かつ意識的に聴く経験を積むことは言語力・学力の向上に寄与するのではないだろうか。

それではどんな音楽に子供を触れさせるのがよいのだろうか。音楽で再現芸術といえれば典型的にはクラシック音楽を意味している。メロディ、ハーモニー、リズムが複雑で、様々な楽器が用いられ、同じ楽譜が歴史的に多様に演奏されてきたクラシック音楽を能動的かつ意識的に聴く機会を提供することで子供達の学力を向上させ得ると考えられるのではないだろうか。

以上が今回開催することになった音楽とことばのワークショップについての基本的なコンセプトです。しかもこのワークショップはこれだけで終わるのではなく、2021年からのセンター試験の廃止という日本の教育制度の大改革と関連する新しい教育のあり方を目指した一大プロジェクトの最初の試みになると私達は考えております。

ワークショップ内容についてはメールやFacebook、ブログ等で随時情報を発信、更新していきますので楽しみにしてください。多くの皆様、保護者の方のご参加を心よりお待ちしております。

いま注目の教育キーワード

ビッグデータの活用による「アダプティブ・ラーニング」

柴田 圭



教育現場におけるビッグデータ、つまり生徒の学習履歴データ蓄積を解析する技術の向上により、一人ひとりが、自分に最適な学習プランの下で「効果的な勉強」を進めていくニーズが高まりつつあります。それが、「アダプティブ・ラーニング (adaptive learning)」という取り組みです。隆盛を極める個別指導型の塾・予備校が典型例の一つと言えますが、学習管理システムをさらに発展させて、学習効果や意欲等に科学的な検証を可能にする課題も残っています。

また一方で、知識の習得に特化した能動的な学習スタイルではなく、知識を応用し課題解決に結び付ける「アクティブ・ラーニング (active learning)」が、教育改革の一手法として本格的導入が検討されています。今後は、従来型の受験テクニクが通用しなくなる可能性も高く、IT環境の充実を踏まえ、修明学園においても、教育サービス提供の在り方を検討していきたいと考えております。

音楽と言葉

神保 克明

受け身の学習ではない「アクティブラーニング」の重要性が高まっています。社会人としてメシが食える大人になる力、IQ、地頭力や考える力といった表現がされているものの力、つまり脳の力やコミュニケーション力を養うことが必要不可欠なのです。そのような力だけでなく、豊かな感性と情緒を育んでいることが日本人としてグローバルに活躍するために一層重要になっていきます。

豊かな感性と情緒を育むには音楽に触れるのが一番ではないでしょうか。音楽は、言葉などの理解がなくとも感情に直接的に響いてくるからです。喜怒哀楽、それぞれの間の微妙な感情、ゆれ動きなどを直接的に感じることが出来ます。さらに音楽は世界中の文化に根付いており、それらを聞くことで世界中の人々の感情を共感できるのです。確かに耳慣れない音楽は最初のうちは気分が良くないかもしれませんが、しかし何度か同じ音楽を聴いていくと快感の度合いが上がっていくようになります。積極的に様々な音楽を聴いて、さらに自分で表現できるようになればグローバルに活躍する力になります。

知識の吸収をする上でも、聴覚を刺激することはとても大切なことです。知識の暗記の際には、テキストを見て何度も書くだけでなく、聴くことや音読を加えればより効率的に覚えられることは言うまでもありません。歴史の年号や山川の名前を歌にして覚える方法は、かなり有効ではないでしょうか。そのようにしたものは、私の場合今でも記憶にあります。語学の習得についても、電子機器の発達により、テキストや単語を聞いてから音読を繰り返して覚えるといった耳からの学習を共にすることは当たり前になっています。さらに、歌に乗せて単語を覚える教材や、英語特有の高い周波数になれることからリスニング力を鍛える教材や速聴リスニングの教材など新しい次元のものも多くあります。

集中とリラックスでは、脳の状態は紙一重の差くらいしかないそうです。勉強するときに音楽やラジオを流しながらやることに反対の方も多くいると思いますが、リラックスさせ自分の気持ちに乗せて、いつの間にか集中モードになるとうこともあります。私は、ずっとラジオや音楽を聴きながら勉強してきました。集中が途切れたときに、そこに勉強道具しかないと思えば逃げたくないので、そんなときに好きな音楽などがなっていると逃げずにすむということもあります。私自身、中学のとき私は英語の勉強は嫌いでしたが、音楽はよく聞いて自室で歌っていたので、リスニング力だけはあったような良い効果もありました。

今後の教育では音楽や聴覚を通じた学修がより重要視されると思います。またみなさんも自分の学習にうまく音楽や聴覚刺激を活かしていくと良いと思います。

「親と教師による学びのサロン」

修明学園は、平成21年9月に「地域の活性化を目指し、安心安全な町づくり」をスローガンに、「親と子と教師による学びのサロン」という企画を立ち上げました。知の発信地となり、地域の皆さんと一緒に「本物・良いもの・良い人」に触れる機会を作り、教育を通じた地域社会への貢献をしていく目的があります。これまで、毎日新聞社の記者、修明学園の出身の医師などを招いて講演をしていただきました。

その第7弾として、平成22年3月21日に、台東区の浅草橋区民館で開催した「慶應義塾大学の先生に触れる、大学とは何か、学ぶとは何か」の講演録を連載形式でご紹介することになりました。

慶應義塾大学 法学部 教授 田上 雅徳 先生
専門分野は西欧政治思想史で、16世紀の宗教改革者ジャン・カルヴァンの政治思想が主たる研究対象。現代日本とアメリカにおけるキリスト教と政治との関係を扱う論考も発表。

連載 大学—せんせいたちのいるところ【5】

慶應義塾大学 法学部 教授 田上 雅徳

【前回より続く】ですから、おおよそのことよい。100%正しくはないかもしれないけど、大きな間違いを犯しているわけではない。実を言うと、世の中はそういう「決して大きく間違っているわけではない」知識と判断でうまくいくことがほとんどです。ですので、「考え方の基本」さえキチンとしていけば何とかやっています。むしろ、下手にある完璧な手続きを身につけてしまうと、その手続きが通用しなくなった新しい社会についていけないこともある。だからこそ、人々は、特に現代に生きる人々は、考えそのものよりも、「考え方の基本」を学ぼうとするわけです。もしかしたら、ですけど、もしかしたら人間というものは、どんな時代や環境が変わっても、そこで何とか生きていくために、ある時代ある環境でしか通用しない考えそのものよりも、どんな時代どんな環境でもなんとか凌いでいける「考え方の基本」を求め、そういう本能があるのかもしれない。動物としての人間が生きていくために、です。

そして、どうやら、なんですけど、どうやらそういう本能に、つまり「考え方の基本」を身につけたいという人々の思いに答えることが出来る、そういうメッセージを発信している場として、大学が期待されているようにです。

なお、ひとことだけ触れておきますと、多くの方は「『考え方の基本』というものを身につけるのは小中学校そして高校であって、それを応用・発展するのが大学だ」、そう思っているようです。僕は、逆じゃないかなあ、と思っています。小中学校や高校というところは、最大公約数的に「まあ、間違っていないんじゃないの」と認められた「考え方の基本」によって集められた知識や情報を覚えさせる場、詰め込まれる場だと、僕は考えています。

「詰め込み」というと聞こえは悪いですけど、とっても大事なことです。実は僕には小中学校や高校の先生たちに対するものすごいコンプレックス、

クスがあるんです。子供たちにきちんと物事を詰め込ませることが出来るこれってとてもないエネルギーを要する作業だと思えます。ですので、それを職業としている人に、僕、リスペクトを感じてやみません。それはともかくとしても、ある程度詰め込まれた知識や情報がないと、「物事」というのはどう考えたらいいんでしようかね」ということと、つまり「考え方の基本」というのはキチンと考えることができないんです。ましてや、それを問い直すことは耗しいんです。だからこそ、義務教育プラス高校で12年間かな、その期間たんまり知識や情報を詰め込んできたと思われる大学生に、大学というところはあらためて、「考え方の基本」を学んでもらおうと思っています。

ただ、この時点で僕は「どうだ、すごいだろ。考えや知識そのものも大事だけど、『考え方の基本』を教えることのできる場が大学なのだ。だから皆さん、大学にいらっしやい」と、そう主張することには、まだためらいを覚えます。

【次号に続く】

2015 修明塾スケジュール

5月の予定

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

6月の予定

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	27	28	29	30		

5月中旬～下旬 中学・高校対象 『1学期・中間テスト対策勉強会』
5月24日(日曜)「音楽とことばのワークショップ」開催(浅草橋)
6月13日(土曜)平成27年度・第1回漢字検定(準会場認定)
6月中旬～下旬 中学・高校対象 『1学期・期末テスト対策勉強会』